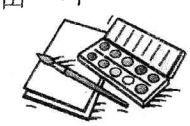
木村文助研究

通信　27号　二〇一三・五・二

山本鼎（かなえ）記念館を訪ねて

自由画教育普及につとめた山本



四月、長野県へ旅する機会があり上田市山本鼎記念館を見学した。

山本は自由画教育、農民美術、創作版画の普及に尽力した方だ。美術作品、略年表など眺めた。そこには“一九二〇（大正9）「赤い鳥」誌で自由画教育普及につとめる”とある。

大野小学校では「赤い鳥」に綴り方と共に自由画三五点入選していて、山本が一点、一点に選評を記している。

大野町教育広報に続いて北斗市教育広報「きらめき」に綴り方・自由画を毎号紹介している。

山本はフランス留学で木版画、絵画を制作、各国展覧会見学で感銘を受ける。

日本での図工教育は模写が中心で、自由な表現、個性的な表現の尊重を主張した。

記念館で山本鼎画伯の功績大である事が理解出来た。

木下

二〇一二年

一一・一　「木村文助研究」通信26号発行

一一・三～四　大野地区文化祭　北斗市郷土資料館（赤い鳥・木村文助コーナー常設展）見学者多数

二〇一三年

一・七　北斗市教育広報「きらめき」No.27に綴り方「乞食」高1吉田みつ、自由画「少女」尋5中村かん　載る。

四・三　北斗市教育広報「きらめき」No.28に綴り方「さけのみ」尋4小笠原みち、自由画「風景」尋6吉田孫七　載る。

四・四　当研究会では、北斗市郷土資料が、26年度市総合分庁舎（旧大野町役場）二階へ移転することから、同庁舎を視察し渡辺舎長より説明していただいた。今回で三回目の視察である。

連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子どもたちの綴方（作文）や絵を投稿し次々と入選。「日本一の綴方学校」と言われました。

乞食

大野小高一　吉田みつ

或日、学校から帰ると、父と乞食のようなお爺さんと炉（いろり）にあたっていた。私は靴を脱いで、家に上がって、火にあたっていると、お爺さんは私を黙って見ていたが、頭を下げて禿げた頭を火にあぶった。すると母は雑巾を絞りながら、「爺さま、なんぼに（年がいくつに）なるね」と聞くと、お爺さんは「七になる」と言った。母は「七十七が」と言うと、お爺さんは「おお年とってしまって困ったもんだ」と言った。

父は「お前、源三（源三という宿か知人宅）行ってとまったらよがべせ（いいだろう）」と言うと、お爺さんは「年寄り婆ねかっていじめられて（婆さんに厳しくされて）食った物身にならね（食べた気がしない）」と言ったので、父と母と私と大笑いした。父は「またおら家さとまったて（とまっても）、寒くて寒くて寝でもおられね（寝ていられない）」と言うと、お爺さんは「なんぼ寒くても庭の隅でもいいしけとめでけさまへ（庭の隅でもいいからとめてください）」と言った。それからお爺さんは父の後ろで御飯を食べた。母は「爺さま、お汁出すべし（おかわりを出しなさい）」とか、また「御飯出すべし」とか言っていた。

後で茶碗を洗っていると、お爺さんは弟に「汝さ、昔話教が（お前に昔話を教えるか）」と言うと、弟はいきなり「うん」と返事をした。するとお爺さんは話を始めたので、私も早く茶碗をを洗って聞こうかと思って、急いで洗っていると、「はあない（もうおしまい）」と言った。私はせっかく聞こうと思っていた話を聞かれなくなったので、お爺さんに「もう一つ教えればいい（教えてちょうだい）」と言っても、知らないふりをしているので、寝ようと思って時計を見ると九時であった。

母は立っていって、ござを敷いて「爺さま、ここさ寝べし（ここに寝ましょう）」と言うと、お爺さんは腰をまげて、小便をする（ため）に外へ出て、また家に入って来て、土間のところにある大きな風呂敷を持って来て、ござのところに置いて、解いて、油布を出すやら切れたたんぜんを出すやらしていた。そして下に何だかぼろぼろに切れた物を敷いて、その上に自分が来ていたシャツを敷いて寝た。母は「爺さま、寒びべね（寒いでしょう）」というと、「いや」と言った。それで母も床に来た。母は「あの爺さまさ、布団着せてもいども、虱がいるもんだが（虱がついているから）」と言って寝た。

朝になると、母の声がした。「爺さま寒びがったべの（寒かったでしょう）」と言うと、「いや暖くて暖くて汗出てら（暖かくて汗が出た）」と言って起きた。夕方学校から帰ると、お爺さんはいなかったので、母に「爺さま行ったが」と聞くと、母は「だれあったら爺、いつまでも置くてな（だれがあんな爺さんをいつまでも置いておくものか）」と言った。

（大正十四年五月号）

少女　大野小尋五　中村かん

（昭和２年８月号）

■ことばの意味

【お汁】みそしる汁など吸い物の汁。おつゆ。

【土間】玄関など屋内で床板を張らず、地面のままにした所。

【油布】機具などを磨くための油のしみこんだ布切れ。

【たんぜん】丹前。衣服の上から着るそでの広い綿入りの防寒用和服。寝間着としても使用。

【虱】人や家畜につく吸血性の害虫。日本でも戦後まで蔓延したが、駆除剤によってほぼ根本的に駆除された。

綴方選評

鈴木三重吉

吉田さんの「乞食」は実写的です。汚ならしい、しかしかわいそうな乞食のおじいさんがよく生き動いていて、人としての運命の哀れさがしみじみと伝わってきます。おじいさんが寝支度をするところなぞは、いかにも哀れです。そのおじいさんに対する、お母さんの撞着的な（矛盾した）気持ちもよく出ています。東京なぞではとても、あんな人を家へ入れてとめてくれる人はめったにありません。それにくらべて、こういう村落的な人間愛を貴く思います。

自由画選評

山本鼎

中村かんさんの「少女」、顔がいい。他の部分も、目、鼻のあたりのように、のびた線で描いてほしかった。

（編集・社会教育課　八木橋直弘）

連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子どもたちの綴方（作文）や絵を投稿し次々と入選。「日本一の綴方学校」と言われました。

さけのみ

大野小尋四　小笠原　みち

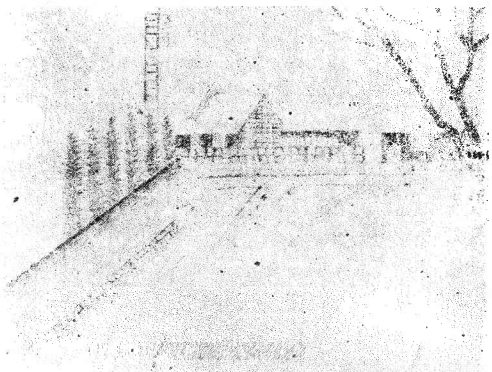
私が家へ行ったら、馬鹿のような人が、やせたすねをべろっと出して炉ばたにねていました。きっと、じっちゃ（おじいさん）が畑にいたから、じっちゃも知らねだべ（知らないだろう）と思って、戸もしめないで、じっちゃの所へ行って「じっちゃ、じっちゃ、馬鹿ねでらえ（寝ているよ）」と言うと、じっちゃが「何あれ、なつ子家のがが（お母さん）の親だで（親だよ）」と言いました。私が「何してねでらべ（どうして寝ているの）」と言ったら、「酒のんでいのげなぐ（動けなく）なったんだ」と言ったから、私は死んでいねべが（死んでいないだろうか）と思って戸の穴から見ていたら、足を動かしたから、起きるんだと思ってかくれたら、「ん、ん、ん、ん、わい」と言った。

私は「死んでねべが」と思って、また、じっちゃの所へ行って、「あの人、死ぬどごだ（死にそうだ）」と言ったら、「何して死ぬてな（どうして死ぬものか）、それより、んな（おまえ）、ままく食った（ご飯食べたか）」と言った。私が「あの人ば、おっかなくて（あの人が怖くて）、おら、穴から見ていたら、ん、ん、ん、ん、わい、って、うなった」と言うと、じっちゃが「これ、まだ酒飲みば（を）、おっかながって家さ入れねで（怖がって家に入れないで）、まあ、家さあべ（家へ行こう）」と言ったから、一しょに家へ入りました。

「まま、け（ご飯を食べろ）」と言ったから、「うん」と言って待っているうちに、く食う気になって、さっさと食って、二はい目の時、じっちゃが行ったから、私は、ままを少しもったのを猫の皿へあけると思って（皿に入れようとして）走って行くと、ちゃわんをがちんと落としました。そしたら、酒のみがおどかって（目を覚まして）、「なあやえ……なあ、けふ、けふ、けふ、けふ、やえ」と言ったから、ぜん（膳）もしまわないで、外へ走って行って、また穴から見たら、だまってねていました。

すこしたって家へ入ると、猫が魚を食っていたから、私は酒のみのいるのも忘れて走って行って、火ばしをぶつけたら、猫が板の下からにげて行ってしまいました。

（大正十四年九月号）



風景　大野小尋六　吉田孫七
（昭和2年6月号）

■ことばの意味

【おどかって】おどかるは「目を覚ます」の方言。主に青森、秋田、岩手の言葉。おどがる。

【ぜん】一人分の食器や食べ物を載せる台。お膳

【火ばし】炭などを挟む金属製のはし。

綴方選評

鈴木　三重吉

四年の小笠原さんの「さけのみ」は、四年生としては事象の表出が粗慢で、しまりが足りません。書きつづりの上でも、私がちょいちょい、つながりを切り直しておいたので、多少、区切り区切り読めるわけですが、最初の一区節などは、もとのままですと、何々したから、こうしたからと、「から」「から」でだらだらと二十七行も区切りなくつながっていました。これは低年級の作によく見る癖で、これまでにも幾度も注意しましたが、小笠原さんも、これからは、何々した、こうした、そうしたら、これこれだった、それからこうこうしたというふうに、なるべくつづりを切ってお書きなさい。だらだらつづけて書くと、読むのにうるさくて、せっかくの感銘がうすくなってきます。

以上の点はそれとして、この作の面白いところは、小笠原さんが、よっぱらいというものに慣れないために、ぐうぐう寝ているのを、死にかけているのではないかとびっくりしたり、いちいちの動作を怖がって、おどおどしながら穴からのぞいたりする、うぶうぶした、女の子らしい胸のとどろきそのものです。なお、これは小さな人たちにはわからないかも知れませんが、われわれには、全編を演劇的に見ると、ある村落的生活相として、一種の哀感がわくところに純情的な興味がひかれます。

自由画選評

山本　鼎

吉田孫七君の「風景」、描きなれない写生画だが、景色の取り入れ方は、ちょっと面白い。左手の塀内に並んだ横木の描きぶりが面白い。前の地面の所も面白い。

（編集・社会教育課　八木橋直弘）

赤い鳥・木村文助コーナー

《北斗市郷土資料館内》

北斗市郷土資料館（旧大野町郷土資料室）
０４１－１２０１
北海道北斗市本町２丁目１２番７号
TEL（０１３８）７７－６６８１
閲　覧　９：００～１６：００
休　館　毎月第一月曜、年末・年始、臨時

「林芙美子作短編小説に引用」、「ラジオ放送に引用」、「北海道教育史に掲載」、「短編小説的と評価された」など多数の綴り方を収蔵！

『１９２０年代（大正から昭和初期）の田舎の生活・文化がリアルに表現・・・都会の先生が読むと子どもたちは声も出なかったという』

生活綴り方のふるさとを訪ねてみよう！

（「赤い鳥」復刻版全巻、木村文助編著書、写真など多数）

○函館方面→車で、国道２２７号を通り大野市街地へ入る
○道北方面→車で、国道５号の大沼トンネルを抜け、１０分ほどして大野方向へ右折し、更に市街地へ進み５分で着く

大野地区市街地の大野小学校門を入り右側木造の建物

発行・大野文化財保護研究会
（略称；文保研・ぶんぽけん）
会長；木下寿実夫
〇四一－一二〇一
北斗市本町３丁目11番32号
（０１３８）７７・８５３５